

令和 7 年度 福岡県立大学 データサイエンス・プログラム 自己点検・評価報告書

【目的】本プログラムは、全学部 of 学生を対象として、データサイエンスの知識やスキルを各専門分野での課題解決に活用できる力を養うことを目的としている。内部質保証の観点から自己点検・評価を行うものである。

【実施体制】

運営責任者	基盤教育センター長
実施組織	基盤教育センター
プログラムの改善・進化	基盤教育センター全学横断型教育小部会
プログラムの自己点検・評価	基盤教育センター全学横断型教育小部会

【データサイエンス・プログラムの自己点検・評価結果】

1. 学内からの視点

1) プログラムの履修・修得状況

本教育プログラムでは、所定の授業科目群を履修した学生に対し、取得単位数に応じて「データサイエンス（リテラシー）学修証明書」「データサイエンス（基礎）学修証明書」「データサイエンス学修証明書」の 3 種類の学修証明書を交付している。学修証明書は 3 年次終了時または卒業時に取得できる。

学修証明書の交付は令和 2 年度から開始した。令和 2 年度末には「データサイエンス（基礎）」又は「データサイエンス」学修証明書を取得した修了者数が 51 名に達した。

令和 4 年度からは、「リテラシー」レベルの証明書交付も開始したことにより、証明書の取得者数は大幅に増加し、同年度には 3 種類のいずれかの証明書を取得した学生は 155 名に達した。以降、毎年およそ 150 名程度の学生が取得している。

学部別の履修者数および修了者数は以下の表の通りである。なお、修了者数は 3 年次終了時点における学修証明書の取得者数を指す。履修者数は、本教育プログラムの必修科目である「情報処理の基礎と演習」（人間社会学部）または「情報処理演習 I」（看護学部）を履修した学生数である。

また、表中の学生数は、令和 7 年 5 月 1 日現在の在籍学生数である。

学部・学科名称	学生数	入学定員	収容定員	令和 7 年度		令和 6 年度		令和 5 年度		令和 4 年度		令和 3 年度		令和 2 年度	
				履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数
人間社会学部	675	150	600	164	97	171	108	176	100	154	106	163	48	162	51
看護学部	384	90	360	91	56	103	36	97	50	89	49	91	0	100	0
合 計	1,059	240	960	255	153	274	144	273	150	243	155	254	48	262	51

2) 学修成果

SD・FD 部会で実施した授業アンケートの結果から、本教育プログラムの学修成果を評価する。

本教育プログラムの各科目群について、令和 7 年度の授業アンケート項目「この授業は、授業到達目標が達成できる学習効果の高い授業でしたか」の平均評価は、「データサイエンス共通基礎科目群」が 3.4、「データサイエンス専門基礎科目群」が 3.5、「データサイエンス専門応用科目群」が 3.5 であった。

本アンケートは、「そう思う (4 点)」「どちらかといえばそう思う (3 点)」「どちらかといえばそう思わない (2 点)」「そう思わない (1 点)」の 4 段階で評価している。平均値が 3.0 以上（「どちらかといえばそう思う」以上）を概ね良好、3.5 以上を良好、3.0 未満を改善が必要であると評価すると、学修成果は全体として概ね良好な水準にあり、専門基礎科目群および専門応用科目群では良好な水準に達している。

3) 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

SD・FD 部会で実施した授業アンケートの結果から、本教育プログラムの学生の授業内容の理解状況の評価する。

本教育プログラムの各科目群について、令和 7 年度の授業アンケート項目「この授業は、総合的に満足できるものでしたか」の平均評価は、「データサイエンス共通基礎科目群」が 3.4、「データサイエンス専門基礎科目群」が 3.5、「データサイエンス専門応用科目群」が 3.5 であった。評価基準は前述のとおりであり、学生の内容の理解度は全体として概ね良好な水準にあり、専門基礎科目群および専門応用科目群では良好な水準に達している。

なお、本アンケートは学生の理解度を直接測るものではないが、授業の分かりやすさや構成の明確さは満足度に影響する要素であり、学生の理解状況を把握する補助的指標として活用している。

4) 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

SD・FD 部会で実施した授業アンケートの結果から、本教育プログラムの後輩等の他の学生への推奨度を評価する。

本教育プログラムの各科目群について、令和 7 年度の授業アンケート項目「この授業は、あなたの知的好奇心や学習意欲を高める授業でしたか」の平均評価は、「データサイエンス共通基礎科目群」で 3.4、「データサイエンス専門基礎科目群」で 3.5、「データサイエンス専門応用科目群」で 3.5 であった。評価基準は前述のとおりであり、全体として概ね良好な水準にあり、専門基礎科目群および専門応用科目群では良好な水準に達していることから、学生の知的好奇心や学習意欲を高める授業が実施されていると評価できる。

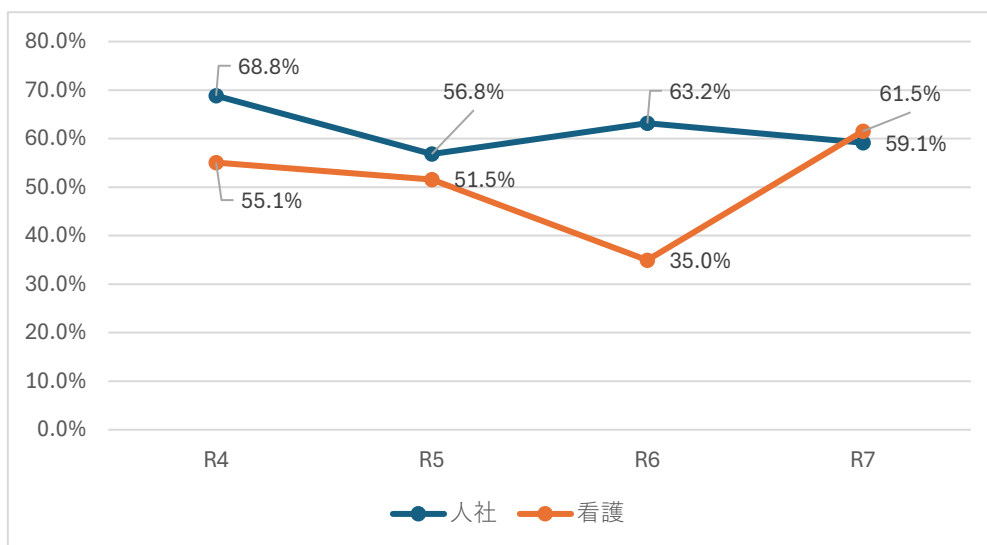
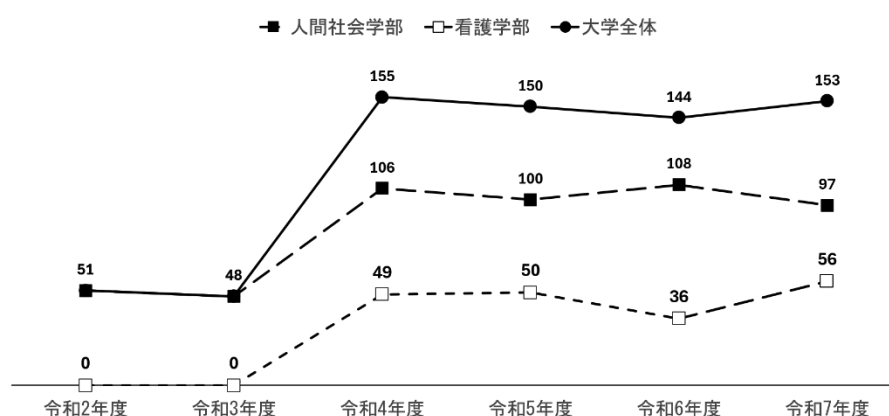
加えて、令和7年度にはSD・FD部会により中間および期末の授業アンケートを実施した。中間アンケートで指摘された課題については、各担当教員が授業対応プランを策定し、学生にフィードバックを行った。また、授業対応プランを公開することで、受講者以外の学生も授業改善の状況を確認できるようにしている。なお、これらの取り組みは本教育プログラムに限らず、本学の全授業科目で実施されている。

このように、学生の意見を授業運営に反映するとともに、授業改善の状況を受講者以外の学生にも共有することで、授業内容や改善の取り組みが広く共有されるようになっている。

5) 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

令和4年度からデータサイエンスのリテラシーレベルを学修した者に「データサイエンス（リテラシー）学修証明書」の交付を開始した。これにより、令和4年度末における3種類のデータサイエンス・プログラムの学修証明書のいずれかを取得した学生数は、令和3年度の48名から155名へ大きく増加した。

データサイエンス・プログラム修了者数（人）



さらに、令和 5 年度からは、全学横断型教育を推進するため、本学の教養教育を担う「基盤教育センター」に「全学横断型教育小部会」を新たに設置し、本教育プログラムの修了者数の増加に向けた取組を進めている。その結果、修了者数は、令和 5 年度 150 名、令和 6 年度 144 名、令和 7 年度 153 名と、おおむね 150 名程度で推移しており、修了者数は安定している。

学部別にみると、人間社会学部では修了者数が令和 5 年度以降 100 名、108 名、97 名とおおむね 100 名程度で推移している。一方、看護学部では修了者数が令和 5 年度の 50 名から令和 6 年度には 36 名に減少したが、令和 7 年度は 56 名へ増加した。今後も両学部における修了者数の増加に向けて、データサイエンスを学ぶ意義を学生に周知し、履修促進を図る。

2. 学外からの視点

1) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本教育プログラム修了者の進路および企業等からの評価に関連して、本学卒業生の進路状況等を示す。なお、卒業生の中には、本教育プログラムの修了要件を満たした者と、一部の科目のみを履修した者が含まれている。

令和 6 年度の卒業生の進路については、就職率が以下の通りであった。公共社会学科 100%（民間企業・団体等、官公庁、教員、大学院進学等）、社会福祉学科 98.0%（社会福祉施設、医療施設、官公庁、教員、大学院進学等）、人間形成学科 100%（幼稚園・保育所、民間企業・団体等、官公庁、教員、大学院進学等）、看護学科 100%（医療施設、官公庁（保健師）、教員（養護教諭）、大学院進学等）である。このように、各学科において高い就職率が維持されており、官公庁、教育、医療、福祉、企業など幅広い分野で活躍している。また、一部の卒業生は大学院に進学してさらに専門性を高めている。

企業・団体等からの評価に関しては、進路・生活支援部会において、毎年卒業生の就職先アンケートを実施し、本学卒業生に対する企業等の評価を把握している。令和 7 年度の調査では、174 件のアンケートを送付し、63 件の回答（回収率 36.2%）を得た。

本学の卒業生が身につけていると感じる能力に関して、「そう思う」または「ややそう思う」の回答を得た割合は、「大学で学んだ専門分野の知識」が 72.6%（62 件中 45 件）、「大学で学んだ専門分野のスキル」が 69.4%（62 件中 43 件）、「情報を分析する力」が 71.0%（62 件中 44 件）であった。これらの結果から、本学卒業生は「大学で学んだ専門分野の知識・スキル」や「情報を分析する力」を身につけている点について、企業等から一定の評価を得ていることがうかがえる。

2) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本教育プログラムの改善に向けて、学外からの意見を広く取り入れるため、本学は令和 5 年度から「数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム」に参画している。

令和 7 年度においても本コンソーシアムで得られる知見を踏まえ、産業界のニーズを踏まえた教育プログラムの充実を図っている。

基盤教育センターの全学横断型教育小部会では、本コンソーシアムを通じて得られる産業界の視点や先進的な取組を参考にしながら、教育プログラムの授業内容や演習方法の改善に取り組んでいる。例えば、学生の理解を促すため、演習課題を小さく分割して段階的に学習できる構成としたり、オープンデータを活用した統計演習を導入したりするなど、実社会のデータを活用した実践的な学習機会の充実を図っている。

3. 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる取り組み

本教育プログラムでは、社会におけるデータと AI の利活用を学ぶ際には、実社会の具体的な事例を紹介し、AI の活用方法を示すことで、学生が数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」を実感できるよう工夫している。

例えば、「情報処理の基礎と演習」「情報処理応用演習」「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」では、社会における AI やデータ活用の事例を紹介しつつ、情報セキュリティの基礎、基礎的な ICT やオープンデータの利用などについて学べるようにしている。題材として、大学での学修と就職後の業務で使うようなものや、質問紙による学術調査のデータなども用いている。多くの学科の学生が受講する「統計学」では受講者の専門にあったデータを入手できるよう行政統計などのデータの入手方法の紹介を行っている。「社会統計学Ⅰ」では、基礎の解説に加えて、社会学や社会調査など履修生の専門分野で実際にどのようなデータ分析が行われるかに重点をおいて講義している。また、「情報数学」では、機械学習の仕組みや応用例を紹介するとともに、数理モデルやアルゴリズムの理論的背景を学ぶことで、データサイエンスや AI が現代社会の課題解決にどのように活用されているかについて理解を深める内容としている。さらに、「データ処理とデータ解析Ⅰ・Ⅱ」では、実社会におけるデータ解析の活用事例を取り上げ、データの処理方法や分析手法を実践的に学べるよう工夫している。加えて、「情報科学」や「情報数学」では、情報技術の仕組みや社会での応用に関する映像資料を活用し、視覚的な理解を促進している。「Web デザイン演習」では、架空のサイトを想定して Web サイト制作を行い、HTML や CSS といった基盤技術から、情報デザインやユーザビリティ・アクセシビリティなどサイト運用まで体感的に学修できるようにしている。「情報検索システム論」では、情報検索技術を中心に、自然言語処理や機械学習など AI 技術の基盤となる理論を段階的に学修できるようにしている。「マルチメディア論」では、音や光などの物理的な性質や理論、それらのコンピュータ上での表現技術を学修するとともに、音声・画像・動画などの編集ソフトを用いてコンテンツ制作演習を行っている。

令和 7 年度の授業終了時の学習満足度に関するアンケート結果では、「学ぶ楽しさ」に関して、「プログラミング概論」の回答者の 93.3%（15 名中 14 名）、「データ処理とデー

タ解析 I」の回答者の 87.9% (33 名中 29 名)、「データ処理とデータ解析 II」の回答者の 93.1% (29 名中 27 名) が「大いに感じた」または「やや感じた」と肯定的に回答した。また、「学ぶことの意義」に関しては、「プログラミング概論」の回答者の 100% (15 名中 15 名)、「データ処理とデータ解析 I」の回答者の 93.9% (33 名中 31 名)、「データ処理とデータ解析 II」の回答者の 96.6% (29 名中 28 名) が「大いに感じた」または「やや感じた」と肯定的に回答しており、本教育プログラムを通じて学生が学ぶ楽しさや学ぶことの意義を実感していることが確認された。

4. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とする工夫

SD・FD 部会では、全学授業アンケートを各学期の中間と期末に実施し、授業方法や授業内容に関する学生からのフィードバックを収集している。特に、授業の「分かりやすさ」に着目し、各科目の教材・指導方法・学習支援の改善に活用している。

さらに、社会の変化や生成 AI などの技術の発展を踏まえ、教育内容や授業方法の継続的な見直しを行っている。

例えば、「統計学」「社会統計学 I」では複数の方法で繰り返し学習することが学習に有効だと考えており、「統計学」では手計算や電卓を使った計算、「社会統計学 I」ではパソコンを使って分析をしてもらい、計算過程やアウトプットの解釈の理解を高める工夫をしている。「情報処理の基礎と演習」「情報処理応用演習」「情報処理演習 I・II」では、Windows や Office の機能説明とともに、なぜ機能が必要になるのかを伝え、毎回の授業でそれを体感できる演習課題を与えている。「情報ネットワーク論」「情報検索システム論」など理論を中心とした科目では、その理論が活かされている具体的な実例を挙げ、理論と実践のイメージをつなげるよう努めている。またアルゴリズムなどを実際に手を動かして体感できるように課題を与えている。

このような取り組みにより、教育内容の水準を維持しつつ、学生にとってより理解しやすい授業となるよう、授業の質の向上を図っている。